

「篤信」の「商売人」

—東天紅上野本店裏手の常楽院別院に関する調査報告—

徳田 安津樹

(解題) 本稿の成り立ちについて若干の説明を加えておきたい。2017年度S2ターム(6・7月)に開講した演習「宗教学的フィールドワーク論」は、「小祠と小教会をコンテキスト化する」というテーマを設定した。そこでは、本学の立地する本郷界隈の小さな祠や教会に焦点を当て、それらがどのように維持・管理されているのかという視点から崇敬者・信仰者の関わりと制度的・社会的コンテキストを立体的に把握・記述することを目指した。受講者全員で半日の巡検を行い(6月17日午後実施)それぞれが関心を抱いた対象について追跡調査をしてレポートを書くという流れであった。

私自身もそれまで気づかなかった小さな宗教施設(崇拝対象物)が本郷周辺には点在しており、各受講者が選んだ対象もそれぞれに興味深いものであった。しかし、2か月という授業期間の設定もあり、多くの場合は残念ながら期末レポート以上の掘り下げまでには及ばなかった。

そうした中、徳田さんはその後も数か月間、継続的に地道な調査を重ね、研究ノートとして一つの宗教誌をまとめるに至った。鉄門から不忍池に向かって無縁坂を下りきると、対象となる小祠が目に入る。「ああ、東天紅脇のあれか」と同定できた読者は本郷・上野通である。さらなる通なら「江戸六阿弥陀」との矢を継ぐだろう。徳田さんはこの物言わぬ小祠をとりまく主な人々を訪ね歩き、その背後に広がる地域の歴史と人々の信仰の営みを本稿において透かし出してくれた。(西村明)



図1 常楽院別院

はじめに

武蔵野台地の東端、かつて忍丘と呼ばれた上野台と、かつて向丘と呼ばれた本郷台の間に、豊かな自然と静かな環境に囲まれた不忍池が広がる。コーヒー片手のビジネスマンは池畔のベンチに腰を下ろし、お散歩カーの園児たちは水鳥を指さす。スワンボートの窓から恋人たちが顔をのぞかしているが、もはや人目を忍ぶ時代ではないようである。学芸を象徴する二つの丘に挟まれているこの池は、江戸時代より佳境地として知られ、様々な変化を経験しつつも、今では都民の憩いの場として親しまれている。その中央、青銅色が映える弁天堂の脇を抜け、蓮池を左手に遊歩道を南西に進むと、大きい窓と独特の三層構造の建物に目が引かれる。高級中国料理店「東天紅」上野本店である。2015年にニューオープンし、白を基調としたモダンな外観へと一新した

同店舗は、向かいの奥にそびえる東京スカイツリーと対になり、既に新しいランドマークとして同

地の風景を形成している。しかしながら、その店舗の裏手の一角に、小さいながらも綺麗に整備されたお堂が設けられていることは、ほとんど知られていない(図1)。

このお堂に安置されている阿弥陀如来像は、かつての東叡山寛永寺の門前町たる上野広小路⁽¹⁾の東面、現在 ABAB 上野店が建てられている場所に居を構えていた、宝王山常楽院長福寿寺(以下「常楽院」)本尊の模刻である。常楽院自体は移転して現在調布市西つつじヶ丘にあり、当お堂は常楽院の別院に位置付けられている。今では老舗と言われる東天紅が誕生するはるか昔、伝承によれば、行基が熊野の杉から六体の阿弥陀像を造り上げ、江戸近郊の六ヶ寺に奉安したとされる。この伝承の真偽はともかく、江戸時代以降その六体の阿弥陀如来は「江戸六阿弥陀」として親しまれ、とりわけ文化・文政期から大正時代にかけて、江戸・東京の民衆が春秋の彼岸にその六ヶ寺を参詣して回る「六阿弥陀詣」が流行した⁽²⁾。常楽院はこの「江戸六阿弥陀」の第五番である。六ヶ寺のうち常楽院だけが御府内に位置し、また江戸・東京随一の繁華街である上野広小路のほぼ中心に位置してただけあって、その賑わいはたいそうなものであったらしく、川柳の格好の題材ともなった。しかしながら、こうした江戸・東京の民衆による行楽を兼ねたある種の「信仰」の対象が、現在に至って、なぜ戦後に誕生した東天紅の裏手に安置されているのだろうか。

本研究ノートは、この問いについて主にインタビュー調査によって検討し、その成果をまとめたものである。まず参考として六阿弥陀詣と常楽院に関する基本的情報を確認し(第1節)、続いて主に口承による記録から、常楽院別院が現在の場所に安置された経緯を整理する(第2節)。後述するように、当別院を管理しているのは東天紅ではなく、その親会社である小泉グループ株式会社(以下「小泉グループ」)である。最後に、現在の常楽院と小泉グループのそれぞれにおいて、その安置の経緯がどのように受け止められているのかを検討する(第3節)。本研究ノートは、その内容を特定の研究枠組みの中に位置づけることを意図していないが、江戸時代から現代へと至る、一般の人々によって担われたある種の「信仰」の保存・継承を示す興味深い事例の一つとして報告することに、多少の意義は認められよう。なお、インタビュー調査の概要は以下の通り。役職はインタビュー当時のものである。

訪問先①：常楽院(東京都調布市西つつじヶ丘)

インタビュアー：徳田安津樹

協力者：本多慈昭氏(常楽院第53世住職)

日時：(1回目)2017年6月30日15:00-17:00、(2回目)2017年8月3日11:00-12:30

訪問先②：小泉グループ株式会社本社(東京都台東区上野)

インタビュアー：徳田安津樹

協力者：石原徹氏(小泉グループ株式会社相談役)、東側恒公氏(小泉グループ株式会社総務担当課長)、田中裕子氏(東天紅販売促進担当係長)

日時：2017年7月14日13:00-14:30

1. 六阿弥陀詣と常楽院

六阿弥陀詣に関する一次史料は少なからず存在しており、研究もある程度蓄積されている⁽³⁾。研究においてはとりわけ史料間の異同の多いことに関心が寄せられ、その点についてこれまで様々な整理・考察が為されているが⁽⁴⁾、ここではあくまで概観に留める⁽⁵⁾。

さて、六阿弥陀詣にまつわる縁起・伝承はおおよそ以下のようなものである。武蔵国のある豪族が一人娘を川向いの豪族へと嫁がせたが、娘は川へと身を投げ、侍女たちもそれを追って入水してしまう。このことに甚く悲しんだ娘の父親は、娘と侍女たちの菩提を弔うために紀伊国熊野権現に参詣したところ、光を放つ霊木を見つけ、それを海に流すと、不思議なことに故郷へと流れ着いた。父親は、そのとき東国を行脚していた行基に頼み込み、その霊木から六体の阿弥陀仏を彫ってもらい、それらを六ヶ寺に奉安した、という話である⁽⁶⁾。

こうした六阿弥陀伝説が最初に記されたのは、江戸時代前期成立の[1]『六阿弥陀伝記』⁽⁷⁾である（大括弧は補遺「江戸六阿弥陀に関する史料一覧」の通し番号）。本書には六ヶ寺のうち複数の寺名・地名が記載されていないが、一番西福寺境内の万治3年（1660）造立の石灯籠に六阿弥陀札所を示す刻印があり、また六番常光寺境内に延宝7年（1679）造立の道標があることから、六阿弥陀詣は17世紀中期に成立したと推定されている⁽⁸⁾。六阿弥陀全ての所在が明確に示されるのは、貞享4年（1687）の[2]『江戸鹿子』においてである。以降、元禄から享保にかけて複数の地誌にて六阿弥陀の寺名・地名が案内され、その後も、道標や標石が次々に建立、御詠歌が作成され、川柳の主題になり、また各寺で縁起が作成されていることから⁽⁹⁾、六阿弥陀は開設以降、江戸の民衆に広く受け入れられていったと考えられる⁽¹⁰⁾。

文化・文政期に入ると、六阿弥陀に関する記述が激増する。そのジャンルも地誌に限らず、案内記、名所図会、紀行文、随筆、戯作と多様化し、各寺に伝わる縁起の異同への関心や、郊外の自然景観を楽しむ姿も垣間見える。明治になるとしばらく参詣者が減少したらしく、刊行物も途絶えるが、新聞では彼岸の度に巡礼案内が掲載されている⁽¹¹⁾。明治末期には盛り返したようで⁽¹²⁾、案内記が出版され⁽¹³⁾、さらに大正期にかけては文化人による六阿弥陀詣の散策記が複数見られる⁽¹⁴⁾。図2から8、18および19は化政期から大正期のあいだに作成、撮影されたものであり、いずれも六阿弥陀詣の流行ぶりを伝えてくれる。

しかし昭和期に入ると六阿弥陀に関する記述は極めて少なくなり、そのわずかな例も、かつての活気が失われたことを示唆するものや、在りし日の様子を偲ぶ懐古的な文章がほとんどである⁽¹⁵⁾。新聞の案内記事も既に無く、この時期から六阿弥陀詣は徐々にその年中行事としての知名度を失ったものと考えられる。とは言え、参詣者はその後も昭和40年代まで絶えなかったらしい⁽¹⁶⁾。

さて、六阿弥陀第五番、常楽院。広小路が「火除」のために造られたものであることは周知の通りであるが、例に漏れず、常楽院を含めた上野という土地一帯は度重なる火災に見舞われ、焼失と復興を繰り返してきた⁽¹⁷⁾。そのため同寺の記録は部分的にしか残されておらず、少ない情報からかろうじて再構成された過去の姿もその時代以前や以後に当て嵌まるとは限らない。とは言え、可能な範囲内で情報を整理しておく。

文政9年（1826）の記録によれば⁽¹⁸⁾、常楽院が「はじめに」で言及した場所に居を構えたのは遅くとも寛永3年（1626）のことで、この年に境内に家作が許されている⁽¹⁹⁾。また元禄16年（1703）に寺社奉行の検分によって門前町屋の家作が許され、追々完成した。境内の広さについては、往古より門前町屋と合わせて835坪5合との記述が確認できるが、同寺は三方を門前町屋で囲われており、間口・奥行に関する記録から計算してみるに実質的な境内の広さはそのわずかが半分ほどしかない。この中に、本堂、地藏堂（地藏尊閻魔相殿）、稲荷社（縁結稲荷大明神）、護摩堂、六地藏尊（石立像）⁽²⁰⁾、金仏地藏尊（立像）、焼香塔（唐銅）などが並んでいた⁽²¹⁾。この点、化政期の[25]『遊歴

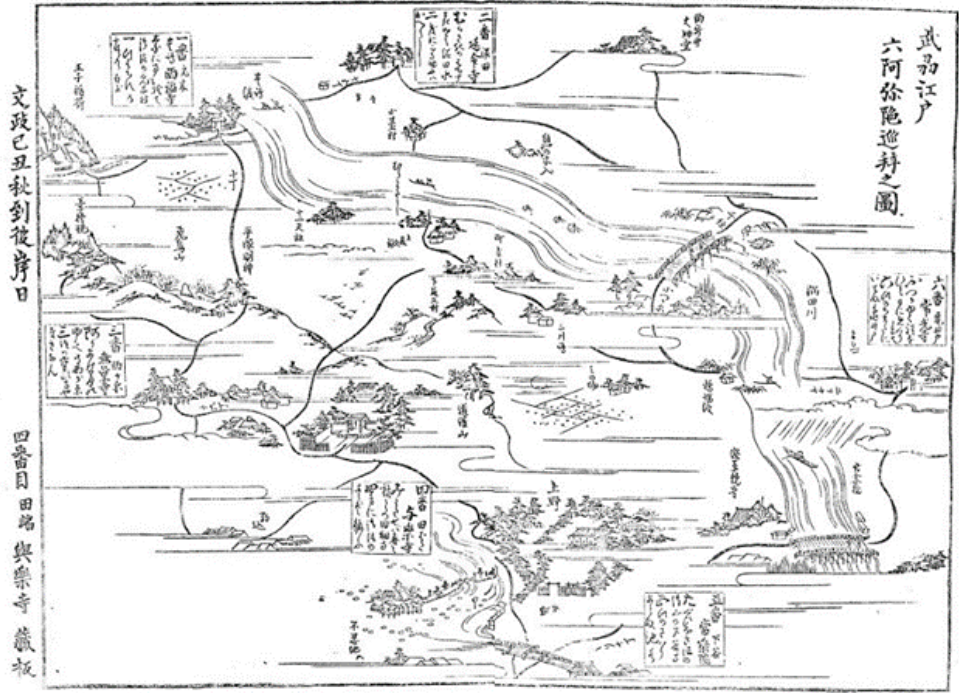


图 2 「武州江戸六阿弥陀巡礼之圖」

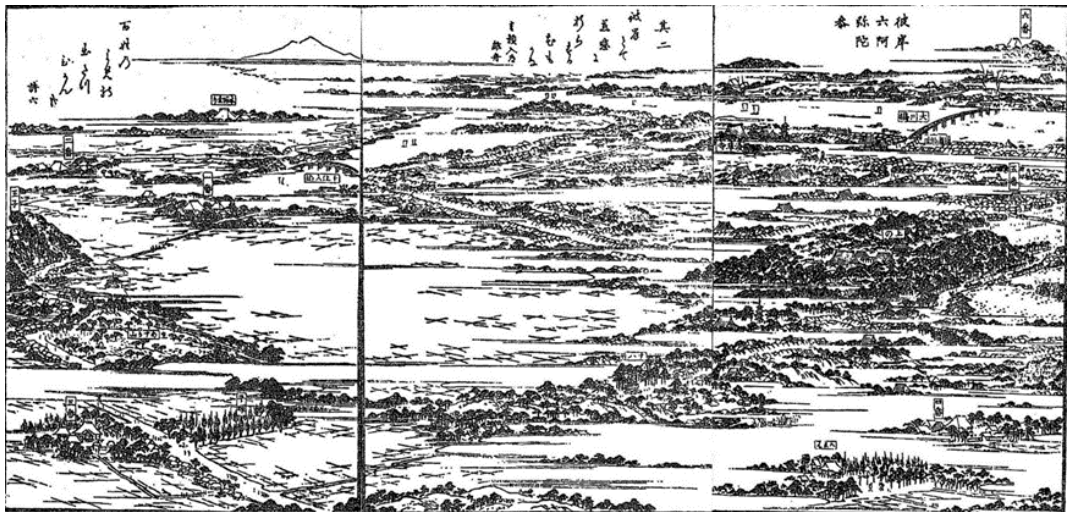


图 3 『東都歳事記』より「彼岸六阿弥陀参」

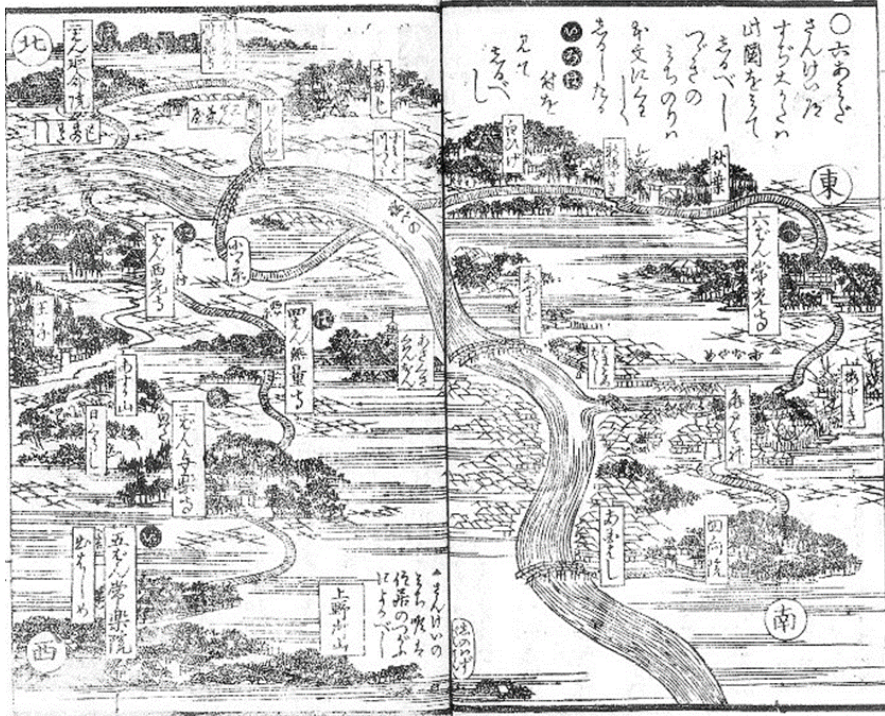


図4 『東都遊覧年中行事』挿絵

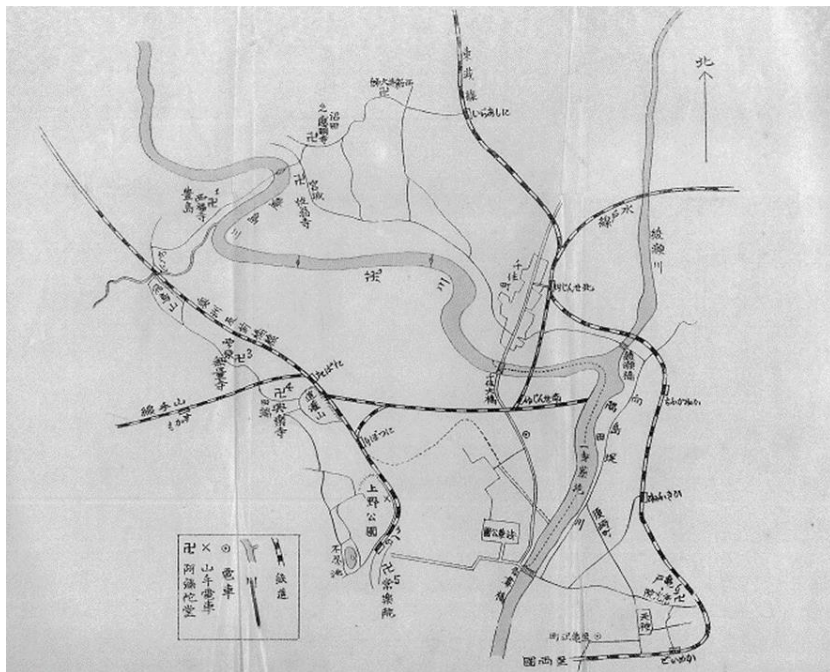


図5 『郊外散策六阿弥陀詣』地図

雑記』には「本堂は西向にして市中に挟まれる寺なれば境内至て手狭し」と書かれており、彼岸時の窮屈さは容易に推察される。本堂（およそ六間四方）の中には、本尊として阿弥陀如来の木像、両脇として観音勢至の木坐像、前立として阿弥陀如来の木坐像が配置されていた。このうち本尊の阿弥陀像が「江戸六阿弥陀」の第五番である。その他、境内には不動尊像と如意輪観世音菩薩像が奉安されており、後者は西国三十三所の写十八番であったが、境内西側山門前の門前横町が「六阿弥陀横町」と称されていたことからして、常楽院はもっぱら六阿弥陀第五番として認識されていたと言って構わないであろう（なお、図 9 から 12 は、化政期から明治に入る前の常楽院の様子や位置を伝える数少ない記録である）。また明和 2 年（1765）から刊行された[13]『誹風柳多留』初篇巻頭に「五番目は同じ作でも江戸生れ」（一・2）と詠われているように、六阿弥陀の中で唯一御府内に位置している常楽院は江戸っ子の自慢のタネであったらしい⁽²²⁾。

彰義隊戦争に際して 15 度目の火災を経験した後、当時の住職は新しい本堂として、かつて松平定信が建立し既に廃寺となっていた谷中の聖天堂を購入した。そのため明治・大正期の本堂はなかなか荘厳なもので、他の寺院に比して立派なものであったという（図 13, 14）⁽²³⁾。

しかし大正 12 年（1923）の関東大震災で、常楽院はまたも焼失してしまう。時の第 51 世住職本多綱祐氏（図 15）によって本尊だけは救出され、まもなく同地に復興したが、境内は縮小したようである（図 20 と 21 とを比較されたし）。また、新たな本堂は急造であったと思われる。昭和 2 年（1927）の紀行文には、かつて江戸っ子並みに扱われた阿弥陀様が「今は不自由なバラック住ひのみちめさである」と評されている⁽²⁴⁾。だが、この時期に見られる常楽院の描写には、興味深い特徴が見出せる。同紀行文には次のように記されている。

上野公園前で電車を下りて東側の不動貯金銀行の横へ入ると常楽院がある。狭い境内に群がる講中の人、香煙立のぼる本尊の前でカンカン証を打つて御詠歌を唱へる爺さん婆さん、何れもお彼岸気分が豊かである。其間にハイカラな少年團や寫眞機をさげたモダン紳士が交つて現代味が加へられている。⁽²⁵⁾

また、昭和 8 年（1933）の別の紀行文には「五番常楽院は上野公園前でカフェーに囲まれ、阿弥陀さんはお念佛の代りに「酒は涙か」でも唱ひさうである」⁽²⁶⁾と記されており、常楽院は六阿弥陀詣の伝統的な姿を残しながらも、周囲や参詣者の様子によってモダンな雰囲気付け足されている。上野という土地柄のためか、常楽院は旧時代と新時代が重なる場所として描かれるようになった、と言えるのではないか。

だが、このようにボロ家となりながらも独特の雰囲気纏っていた常楽院も、東京大空襲によって上野一帯もろとも深刻な被害を被ってしまう。同寺院の変遷に東天紅が関わってくるのは、無論この後のことである。

2. 常楽院別院建立の経緯

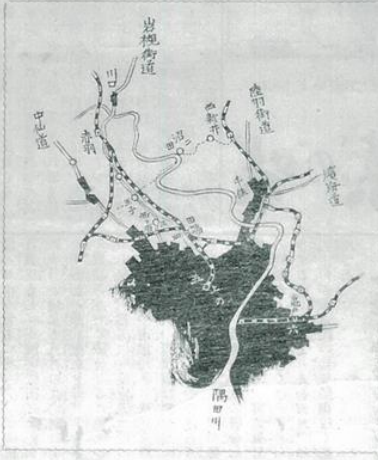
以上のような背景を持つ常楽院であるが、では、なぜ現在に至って、同寺院別院のために、東天紅の敷地のなかに特別に土地が設けられることになったのであろうか。本節ではその経緯を整理していきたい。但し、戦後の混乱もあつてか、これ以降の変遷についての文書的記録はほとんど残っ



図6 十返舎一九『六あみだ詣』より「六阿弥陀詣人之圖」



図7 『江戸名所図会』より「六阿弥陀巡」



日曜散策案内 六阿彌陀巡り

一、王子の西園寺(一巻)

二、比叢島村より荒川へ

三、阿彌陀の像しを鑑る

四、田圃の風景(四巻)

五、上野或小路の常盤松(五巻)

六、鏡井(常先(六巻))

七、四新井の大師比叢

八、門前より汽車にて鏡井へ

(行印社女國京東)

図8 「日曜散策案内 六阿彌陀巡り」

「篤信」の「商売人」

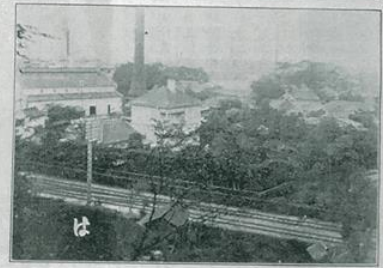
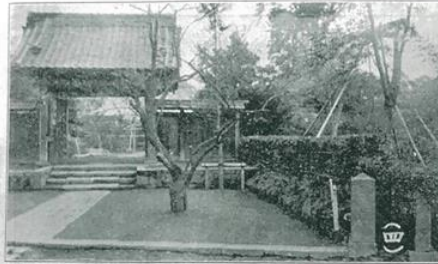
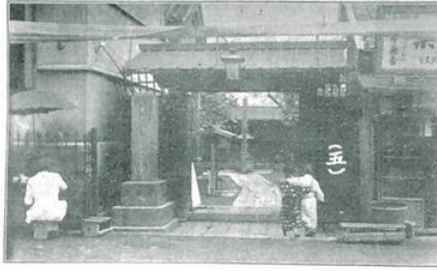




図9 『江戸名所図会』より「常楽院」



図10 「東都下谷絵図」

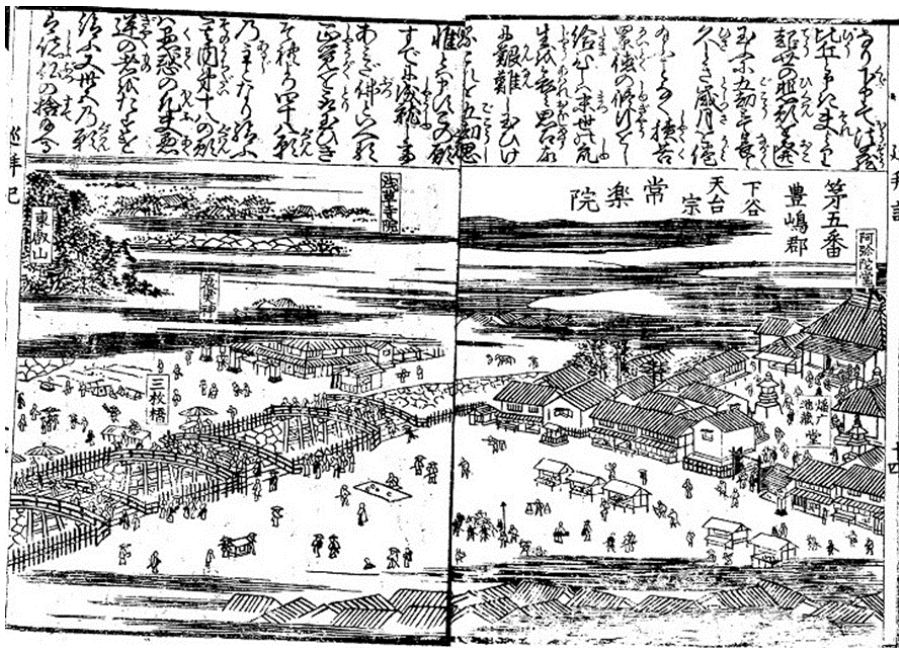
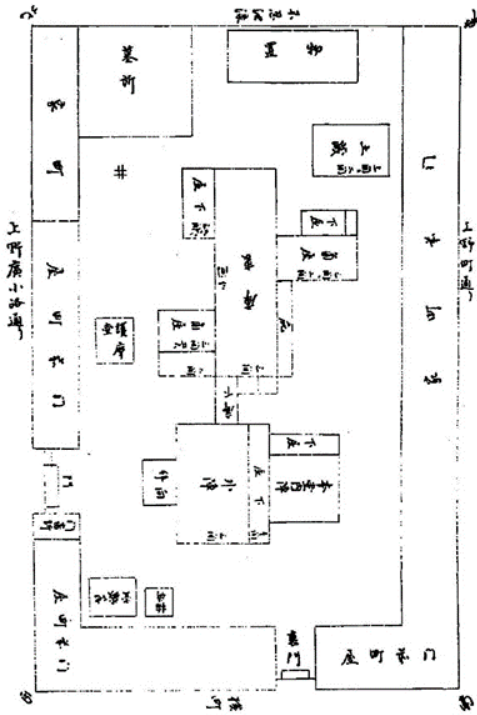


図11 『六阿弥陀詣』より「常楽院」



左：図12 『御府内寺社備考』より
「常楽院境内図」

下：図13 常楽院境内（明治末期）

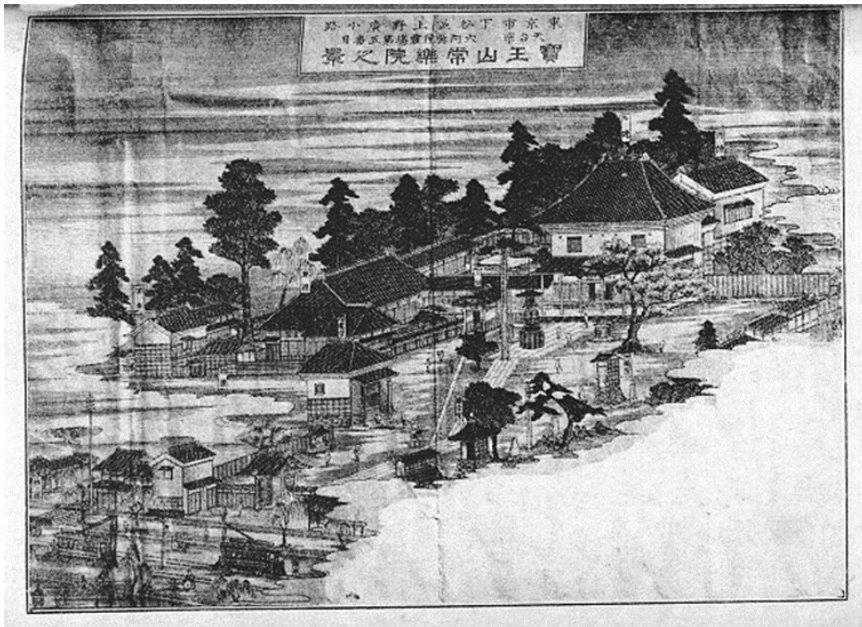


図14 『郊外散策六阿彌陀詣』より「宝王山常楽院之景」

ておらず、頼りとなるのは口伝されてきた情報だけである。そのため、確実になかったり、詳細が不明確であったりする部分も多い。とは言え、その中でも最も信頼できると考えられる情報に依拠するならば、次のような経緯となる⁽²⁷⁾。

既に述べたように、常楽院は東京大空襲によって焼失してしまったが、その際本尊はまたも本多綱祐氏によって無事に救出されていた。しかしながら今度は、本尊を再び上野に置くのではなく、郊外に避難させることとなった。常楽院は、既に昭和 8 年（1933）から神代村金子（現在の調布市西つつじヶ丘）の延命院（福増山延命院蓮蔵寺）を綱祐氏の将来の隠居寺として利用していたが、空襲を機に常楽院本尊は同地に移され、延命院は常楽院に合併・吸収されることとなった。ここに福増山常楽院長福寿寺が成立し、現在に至るまで同地にて存続している。

ところで、焦土と化した上野に乗り込み常楽院があった土地の大部分を買い取ったのが、小泉通音氏（図 16）である。氏は、大正 6 年（1917）から深川門前仲町にて洋品店「赤札堂」を営んでいた清一氏の妻であり、清一氏の死後に経営を引き継いでいた。昭和 20 年（1945）、同じく戦災によって深川の店は焼失してしまったが、通音氏はそれを機に上野広小路の同地を買い取って、そこに赤札堂をいち早く再興した（図 17）。「三等切符のお値段で一等のお買い物」をキャッチフレーズにどこよりも安く売る経営手法で巨利を得て⁽²⁸⁾、昭和 22 年（1947）には赤札堂の親会社にあたる「小泉グループ株式会社」を設立するに至っている。この頃、上述の通り常楽院自体は既に移転していたが、赤札堂の敷地内には参拝者の便のために仮堂が設けられ、常楽院本尊の阿弥陀仏の模刻が安置された⁽²⁹⁾。

昭和 25 年（1950）、小泉通音氏が逝去し、息子の小泉一兵衛氏が同会社の経営を継ぐこととなった。昭和 32 年（1957）の赤札堂ビル建設に伴って仮堂の処遇についての議論がなされ、その後、ビルの増改築に伴って敷地内で少しかだけ移転されたと伝えられている（図 22 および 23 の広告にて当時の赤札堂の雰囲気を知ることができる）。最終的には、昭和 36 年（1961）、不忍池の西畔に新たに開業した東天紅第一号店の北西の一角に、常楽院別院としてお堂が設けられることとなった（図 24, 25）。

さらに代替わりして小泉和久氏が社長となった後、平成 27 年（2015）、東天紅上野本店のニューオープンとともに現在の阿弥陀堂が建立された⁽³⁰⁾。このお堂の建設費や管理・維持費は全て小泉グループの支出によるものであり、他方、このお堂に投じられた賽銭は全て調布の常楽院本院に送られている。さらに、毎年 1 月と 7 月にはこのお堂で「例祭」を執り行い、常楽院の住職による読経の後に、小泉グループ、赤札堂、東天紅の代表者が阿弥陀仏への供養を行っている（図 26, 27）⁽³¹⁾。

現在の常楽院別院の境内には、阿弥陀堂の他、石仏が一体、石灯籠が一基、庭石と思しき岩に囲まれた石水鉢が一つ、同様の岩が一つある⁽³²⁾。阿弥陀堂には、りん、および火を使わない電源式の蠟燭台と線香台が置かれ、花と水がお供えされている。石仏の前には台が設けられ、水がお供えされている。境内の左手、東天紅店舗の壁面には、常楽院による「江戸六阿弥陀縁起」の掲示が掛けられている。門の外側、左手には「江戸 六阿弥陀 五番目」と書かれている標木が、右手には、表に「五番目は同じ作でも江戸産れ」と刻印された「誹風柳多留巻頭の地」を示す石碑が設けられている。この石碑は、平成 27 年（2015）に柳多留二百五十年実行委員会によって、小泉グループの許可を得て建立されたものである。なお参拝者については、調査がなく厳密ではないが、近隣の住人や社員が多いという。

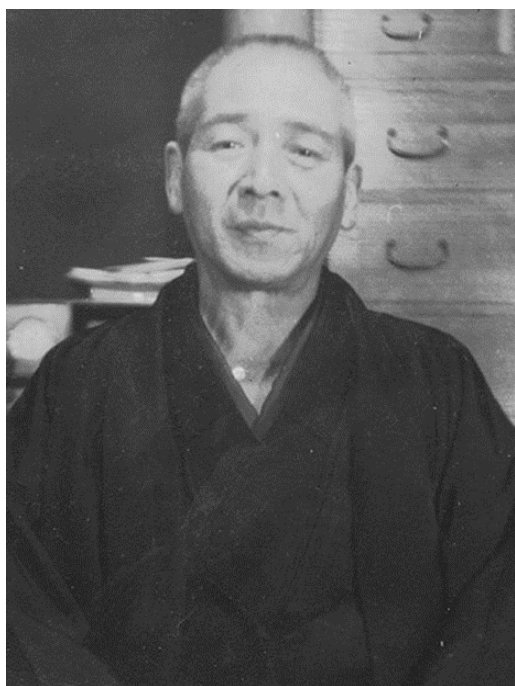


図 15 本多綱祐氏（常楽院第 51 世住職）



図 16 小泉通音氏（赤札堂 2 代目社長）



図 17 上野広小路（昭和 24 年 4 月）

右手中央に「赤札堂の日用品」の看板が見える。

3. 常楽院と小泉グループの見解

以上のような常楽院の変遷と、小泉グループによる手厚い世話に関して、現在の常楽院と小泉グループはそれぞれどのような受け止め方をしているのだろうか。

常楽院第53世（先代）住職の本多慈昭氏は、この点について、小泉グループ先代社長の小泉一兵衛氏と現社長の小泉和久氏がともに「篤信家」である、という認識を示している。慈昭氏が伝え聞いた話によれば、赤札堂のビルが建設される際、同地からは多数の人骨が発見され、さらに工事中には事故が多発し、また建設後の店舗においてもしばしば事件が発生したが、一兵衛氏が常楽院の阿弥陀如来をお祀りしてお清めを行ったところ、そうした悪い出来事がピタリと無くなった。こうして一兵衛氏はますます信仰を篤くし、阿弥陀如来を手厚くお祀りすることになったという。このことを踏まえつつ、慈昭氏は、小泉グループが現在もお阿弥陀如来を庇護してくださっているのは、一兵衛氏が備えていたこうした「篤信家」としての性格が現社長の和久氏にも受け継がれているからだ、との見方を示している⁽³³⁾。

しかしながら慈昭氏は、この「篤信家」という言葉は単に神仏への崇敬の念が強いということだけを意味するのではなく、そこには和久氏自身の人格的な部分も関わっていると、次のように語っている。

今の社長さんはとっても信心深い方で、自分のところだけ立派になればいいとかそういう考えじゃない方なんですよね。〔中略〕会社とかお店というのは、普通はどうやって利益を上げるかとか、そういうことを考えるけど、小泉社長は本当のところではみんなが幸せにならないといけない、自分のところだけ繁栄すればなんてことは絶対ない人ですね。そういうところがあるから、阿弥陀さんへの供養とか、一生懸命にやるんでしょね。⁽³⁴⁾

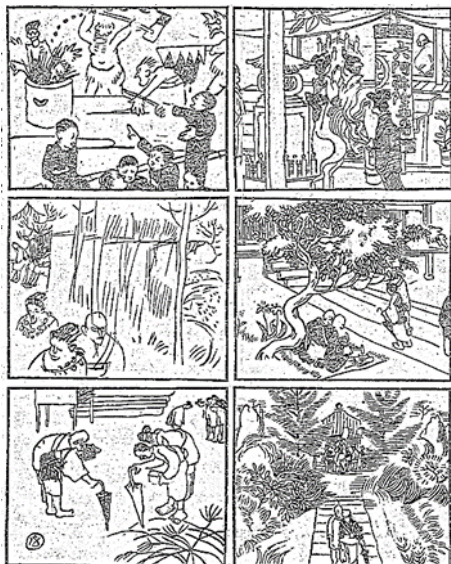
慈昭氏によれば、和久氏の根本には、自分の利益だけでなく人々の幸せを追求しなければならないという、仏教の基本である「利他」の心にも通じる精神が宿っている。そして、この精神に基づいて、地元の住民に対する感謝や、人々が幸福に暮らしていることへの恩返しを込めて、阿弥陀如来への供養を行っているのだ、という。以上の慈昭氏の見解に基づくならば、小泉グループが現在に至るまで常楽院の阿弥陀如来のお世話をしているのは、現社長が仏教的精神に通じる「報恩感謝」の心をもって神仏を崇敬する「篤信家」であるからだ、ということになる。

他方、小泉グループ株式会社相談役の石原徹氏は、先代社長の一兵衛氏が赤札堂ビルの建築の際に仮堂を移転したことや、現社長の和久氏が東天紅改築の折に阿弥陀堂のための土地を設けたことについて、次のように語っている。

一兵衛さんなり、今の和久さんなり、特に宗教上どうのこうのということはないけれども、商売の人だから、あそこに江戸六阿弥陀があって、ビルを建てるまでそこにあったわけだから、それをそのままやめちゃうとか、〔中略〕屋上に上げちゃうとか、そういうことはやっぱり商人だから好まない、ということですよ。だから、ここへあえて持ってきたと。⁽³⁵⁾

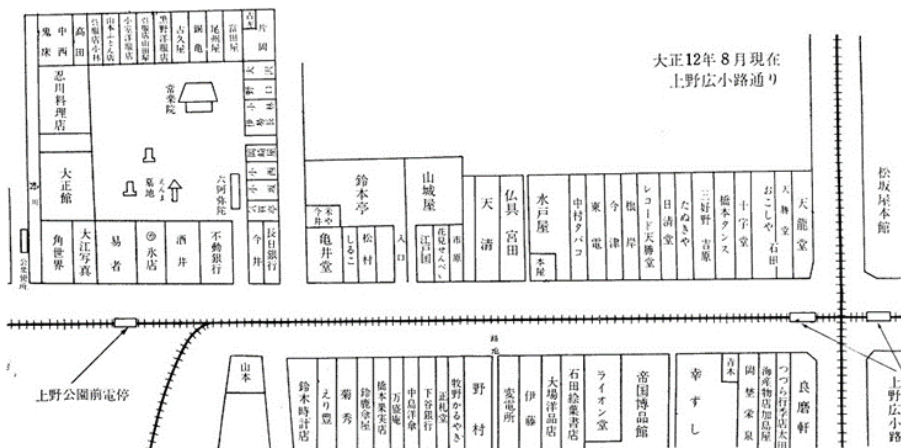
石原氏は、「篤信家」という一個人的な視点よりも、両社長が下町で育った「商売人」であることを

「篤信」の「商売人」



左：図 18 朝日新聞（1912年）挿絵

下：図 19 読売新聞（1918年）写真

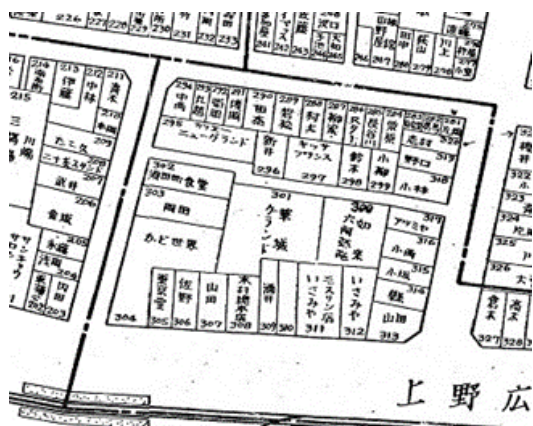


上：図 20 上野広小路略図（1923年8月）

境内下右手に「六阿弥院」、下中央に「えんま」、その左に「墓地」と書かれている。

左：図 21 上野広小路地図（1940年2月）

「六阿弥陀如来」との文字が見える。



強調し、そのような人間にとって、神仏は「潰すわけにはいかない」、「ないがしろにするわけにはいかない」、「捨てちゃうわけにはいかない」ものだと言う。しかし氏は、このような態度を取る理由として、神仏を蔑ろにすることによるバチに対する「おそれ」のようなものがあるということに触れつつも、とりわけ常楽院の阿弥陀如来が由緒あるもので、日頃お参りをしている地元の方々がいらっしゃるから、ということを重視する。実際、東天紅が店舗を新たに作る折には、阿弥陀堂の今後の扱いについての問い合わせがあったという。このような地域住民とのつながりを重視して、これまで地元で守り神のように祀られて大切にされてきたものを「継承しよう」、「守っていこう」、「そのまんま維持しよう」という方針を取った、とのことである。さらに石原氏は、確かに阿弥陀如来に対して特別に帰依しているわけでは全くないということを確認しつつも、同時に、このような態度は決して消極的なものではなく、あくまで「常識」としてやっている、とも語っている。つまり、普段は特に信心深いということもないけれども、何か困ったことがあった時には手を合わせる、というのが日本人の本来の宗教的な在り方であって、小泉グループの態度もここからはみ出るものではないという。そして石原氏によれば、これらの点は、上野という、個人経営者が多く、江戸の下町の古い気風を残す商売の土地柄に一般的に見られるものだという。以上の石原氏の見解に基づくならば、東天紅、引いては小泉グループが常楽院の阿弥陀如来のために土地を設けているのは、経営者の個人的な性質というよりも、上野という土地がそもそも江戸の商売の気風を残しており、現社長の和久氏がそうした下町の「商売人」の気質を受けついでいるからだ、ということになる⁽³⁶⁾。

両者の見解には、確かにズレがある。すなわち東天紅の敷地に別院が設けられていることについて、常楽院側が小泉グループ社長の個人的な「篤信家」としての性格をとりわけ強調しているのに対し、小泉グループ側は上野の「商売人」に共通する一般的な性格によるものだとする。また、常楽院側は、小泉グループが阿弥陀仏の供養に積極的に関わっていると認識しているのに対して、小泉グループ側は、消極的ではないとしても、常識の範囲を超えた特別な宗教心はないとしている。

とは言え、これらの見解について、どちらかが正しく、どちらかが誤りであると考えする必要はない。それは一つには、両者の見解は同一の事態について異なる視点から見たものとして同等であって、またその相違自体、宗教的なものを巡る諸相として考察の対象になりうる、ということもある。しかしながら、少なくとも現在小泉グループが阿弥陀仏を供養している動機については、両者の見解に大きな違いはないのである。実際、常楽院側は、小泉グループが常楽院の阿弥陀仏に帰依している、とまで考えているわけでは決していない。つまり、常楽院側が言うところの「篤信」とは、単に特定の神仏を恐れ敬うことではなく、根本的なところで自分たちに関わる人々に対する「感謝」と「報恩」の心を持ち、その具体的な表出として神仏を崇敬する、ということの意味しているのである。小泉グループ側も（「感謝」や「報恩」という言葉までは使っていないとしても）とりわけ地元の人々とのつながりを重んじ、地元の人々が大切にしてきたものを守っていこうと考えており、こうした態度に江戸の下町の「商売人」の気風が流れていると感じている。要するに、両者が用いる「篤信家」と「商売人」という言葉は、「お世話になっている人々とのつながり」という点において、緩やかに結び付いているのである。

いよいよあと
15時間!

あす31日開店

赤札堂ビル全館落成記念超廉売市

10月31日・11月10日

●特別卸値仕品・ホントの一円●(各限特設会場)

純絹京糸の糸ル	120円/箱	65円
純絹野島カ	120円/箱	250円
純絹中太コ	450円/箱	250円
大カト地1	220円/箱	125円
スーツ地1	220円/箱	250円
子供用服タンバ	800円/箱	750円
タトロン紳士T	800円/箱	550円
婦人スリ	800円/箱	450円
婦人ロンパ	800円/箱	295円
婦人ペイルソ	380円/箱	190円
婦人長ズリ	170円/箱	90円
婦人ストラ	800円/箱	450円
ペン用紙	10000枚	400円
ペン用紙	10000枚	450円
ポアボール	10000枚	70円
暖房用器具	10000枚	480円
純綿上等衣	10000枚	350円
アボロ香	10000枚	200円
純絹紳士	10000枚	500円
婦人別	10000枚	200円
婦人別	10000枚	45円

TEL: (05) 0121 (代) - 0129 ●開店午前9時半 期間中、毎日先着1,000名様は超品品!

冬物大特売

第一弾!!

灰色の空も
つめたい風も
これさえあれば
大丈夫!

破格の安値で防寒衣料の大奉仕!!

二等切符のお値段段で一等のお買物!!

28⁰⁰・29⁰⁰・30⁰⁰

TEL: (05) 0121 (代) - 0129



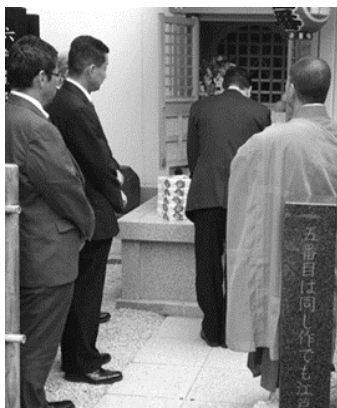
上左：図 22， 上右：図 23

「赤札堂」広告

左：図 24 オープン当時の東天
紅・上野本店（旧）

下左：図 25 上野本店（旧）裏
手の常楽院別院

下中央：図 26， 下右：図 27
「例祭」の様子



おわりに

以上、東天紅の敷地に安置されている常楽院別院の調査を行ってきたが、そのなかで、同別院に関して気が付いたことを二点記しておく。

- (a) かつて江戸六阿弥陀の一つとして栄えた常楽院であるが、現在の別院においては、彼岸の年中行事として行楽も兼ねて参拝されるという「非日常性・周遊性」は後景化し、むしろ地元の人々によって日ごろ参拝されているという「日常性・地元性」が前景化している。
- (b) 必ずしも特定の共同体のシンボルとして機能していない。(a) で述べた「地元の人々」とは、「上野に住む人々、上野で働く人々」という広い意味で捉えられるべきもので、組織立っていない。また常楽院の阿弥陀如来は小泉グループを守護するものではなく、他方、確かに小泉グループは別院のお世話をしているものの、組織全体として庇護しているのではない。

この二点は、「六阿弥陀の一つでありながら六ヶ寺の中で唯一御府内にあり、しかも江戸随一の繁華街である上野の中心に位置していた」という常楽院固有の特徴に関わっていると思われる。すなわち、主に六阿弥陀詣の参拝を基盤とする祈願寺として栄えた常楽院は、必ずしも特定の共同体と結びつくものではなく、他方、六阿弥陀詣が衰退して行事としての参拝が減少した後は、そうした性格を維持しながらも、「上野という土地」と結び付いていったのではない。

但し、以上はあくまで今回の調査の範囲内から推察されることで、常楽院別院がその他にも多様な性格を持つことは十分に考えられる。例えば、別院は上野に残る江戸文化の名残として、江戸文化の象徴としての機能を持ちうる。確かに、小泉グループが別院のお世話をするのは「地元で祀られてきたものを継承しよう」という姿勢からであって、「江戸の信仰を守ろう」といった大義からではない。しかしこうした世話の主体の事情とは別に、実際、別院の敷地には「誹風柳多留巻頭の地」の石碑が建てられているのである。だが、こうした事柄についての検討は、別院を巡る今後の動向や参拝者の意識などについての更なる調査を待たなければならない。

江戸時代から昭和 40 年代に至るまで、とりわけ文化・文政期から大正時代にかけて盛んであった六阿弥陀詣に出かけた人々が、どの程度の真剣さをもって参詣していたのかは分からない。無論、文献を紐解くならば、江戸六阿弥陀への巡礼が、行楽のためであったり、顔馴染との噂話をするためであったり、その他さまざまな目的の口実となっていたことは容易に察せられる。しかし、各寺の本堂は御詠歌や鉦の音で常に響いていたというから、やはり熱心な参詣者も相当にいたことだろう。たとえそれほど真剣さを持たなかったとしても、仏前に手を合わせるからには、何かしらの思いや願いを唱えていたはずである。この点、現在の参拝者もそう変わってはいない。今回の調査の中で改めて認識させられたのは、或るものが残され、継承されてきたからには、それは何らかの役割を担い続けている、ということである。東天紅の裏手にひっそりと佇む常楽院別院もまた、地域の人々の日常の思いや願いを受け止め続けている。われわれはこうした、残され、継承されてきたものに込められている思いに、もっと耳を傾けるべきではないか。少なくとも、そうした存在である別院の阿弥陀堂を、「篤信」の「商売人」が支え続けているということは、もっと注目されてしかるべきである。

謝辞

本稿の作成にあたって、常楽院第 53 世住職本多慈昭氏、小泉グループ株式会社相談役石原徹氏、

小泉グループ株式会社総務担当（現）次長東側恒公氏，東天紅販売促進担当係長田中裕子氏には、お忙しい中にもかかわらず時間を割いて様々な質問に懇切丁寧にご回答くださり、また貴重な資料をお見せくださいました。厚く御礼を申し上げます。

註

- (1) 上野広小路の幕末までの正式な呼称は「下谷広小路」であり、町名としての「上野広小路町」の成立は明治2年である（「下谷広小路」，平凡社地方資料センター編『日本歴史地名大系』第13巻，平凡社，2002）。しかし，混乱を避けるため，本稿では同通りを一貫して「上野広小路」と呼んでいる。
- (2) 「江戸六阿弥陀」を[33]『江戸名所図会』（1836）から抜き出すと下記のようなになる（括弧は現在の寺名とその所在地）。なお，「江戸六阿弥陀」は他にも「武州六阿弥陀」や「北方六阿弥陀」とも呼ばれたが，本稿では「江戸六阿弥陀」と呼ぶことにする。また，「六阿弥陀」の通称で知られていたものは他にも江戸，諸方に多数存在するが，本稿では「六阿弥陀」を「江戸六阿弥陀」のみを意味するものとして用いている。

一番	三縁山西福寺	豊島	禅宗	(西福寺・北区豊島)
二番	甘露山延命寺應味院	下沼田	真言宗	(恵明寺・足立区江北)
三番	佛寶山無量寺西光院	西原	真言宗	(無量寺・北区西ヶ原)
四番	寶珠山與樂寺	田畑村	真言宗	(与樂寺・北区田端)
五番	宝王山常樂院長福壽寺	五條天神の南	天台宗	(常樂院・調布市西つつじヶ丘)
六番	西歸山常光寺	亀戸邑	曹洞派	(常光寺・江東区亀戸)
- (3) 六阿弥陀，および六阿弥陀詣に関する一次史料については補遺を参照。先行研究については註や補遺にて紹介していくが，中でも最も重要であるのは，六阿弥陀研究の先駆にして最も総合的な研究である，塚田芳雄・榎本忠司『六阿弥陀の研究』全23号（自刊，1979-1980。以下『研究』と略す）であると思われる。これは江戸時代前期から昭和時代にわたる関連史料（標石・道標・六地藏の刻字，御詠歌，川柳，図会を含む）を収集・整理して原稿用紙に自筆にて書き写し，それぞれに分析ないしコメントを加えたものである。異同の多い縁起や寺名等についても詳細な考察が行われ，関連事項の年表も付されており，一読するだけで「六阿弥陀」に関する全般的な知識を得ることが出来るという偉大な労作である。しかし，公共図書館への所蔵が極めて少なく，人目に触れ難い状況であることが残念でならない。そこで本研究ノートでは，註や補遺にて塚田・榎本による考察を可能な限り紹介することになっている。なお，『研究』は後に，塚田芳雄「六阿弥陀」（『調査報告』第5号，東京都北区郷土資料館，1990）にまとめられるが，多くのコメントや考察は割愛された形となっている。
- (4) 六阿弥陀に対する研究者のアプローチは，『研究』の次の文章にほとんど集約される。長いが引用する。「江戸六阿弥陀に関する資料について結論的に物を申す事は聊か即断にすぎるが今日までの文献資料をみる限りにおいてはすべて断片的であって，まとまったものは何一つないといっても過言ではない。／換言すればすべては伝説であり，随想であって史実を伝えるには程遠いものである。こうした史実とか伝説とかには全く何の関係もなしに江戸の庶民は春秋に

は夕刻まで疲れをものともせず歩いた。六阿弥陀詣が江戸の風物詩として庶民に絶大な人気を博していたのは何故か。江戸の知識人はこのような情景を筆に留めて記録した。／今残されているものはさうしたものばかりであるが、筆によって記録が異なっているのに気が付く。然しながらこれ等の記録の中から六阿弥陀を史的に解明する事はいうならば全く困難といっても差支へはない。そこに残されているものは庶民の心情であるがこれはその時代時代における六阿弥陀の繁栄でもある。」(7頁,「／」は改段落)。六阿弥陀に関する史料は六阿弥陀そのものの史的記録としてではなく、江戸の民衆の心情の表出として見るべきである(その意味において、六阿弥陀と六阿弥陀詣は不可分であると言えよう)。史料間の異同は、それ自体、そこから各筆者やその情報元の暮らしや思いを読み取りうる素材となる。なお、六阿弥陀を伝える史料は、主に①六阿弥陀の縁起、②寺院の名称、③参詣巡路から構成されることが多いが、これら3つのそれぞれについて史料間の異同が見られる。①については註6参照。②については、『研究』第3号か、あるいは久保田啓一「太田南畝編『ひともと草』試注(十一)——藤原暲「六阿弥陀詣」(上)——」、『鯉城往来』第16号、2013、81-86頁を参照して頂きたい。③については異同というよりも時代による変化と考えられ、当初は一番から順に紹介されていた(この場合、一番の後に「豊島の渡し」から隅田川を渡り、二番参詣の後に一番に戻ってから南下、五番下谷の後に六番亀戸へ)が、文化・文政期には五・四・三・一・二・六(下谷から出発して北上、一番の後に隅田川を渡り、二番の後に川沿いを南下して亀戸へ)の順か、その逆が多く見られる。塚田の見解に従うならば、享保以降荒川の改修工事により土手を伝わっていく順になったようである(『調査報告』29頁)。

- (5) 六阿弥陀詣の変遷については『研究』が次のように簡潔にまとめており、本稿もそれに多くを負っている。「六阿弥陀の変遷を考えると三期に分けられる。／第一期は元禄頃までの百年間となる。家光の各寺院への寄進に始まり明暦の伝記刊、常光寺や二番へのしるべなど、信仰がおもむろに開花していく。元禄三年の江戸鹿子において六阿弥陀は広く人々の間へ弘まってい。／第二期は享保から享和頃の時代である。諸々の人の筆にとり上げられ各種の案内記も出版され、六阿弥陀は江戸の信仰として確固たる地位を築くかのようなのである。この間性翁寺・末木の観音、或は西方・山の手六阿弥陀も現われ皆それぞれに繁栄を来している。この頃までは信仰一筋の面の方が強く打ち出されている。／第三期は文化以降幕末までであるが、寛政頃から六阿弥陀には行楽の色彩が加わってくる。飛鳥山王子の繁昌が一因でもあろう。文化の一九の滑稽本や川柳に表現される六阿弥陀詣には、庶民の信仰にプラス行楽そして遊興の面も併せ強く打ち出されてくる。出版物も庶民を対象とする案内記、道案内の地図、御詠歌等が多く出ている。又開帳が行われ出すのもこの頃の一つの特徴である。黒船の来航を迎へ世情が騒がしくなると人足も減少をみせていった。／明治に入り六阿弥陀が若干の繁栄を取り戻すのは日露戦の勝利による寺社参拝の復興に伴ってである。」(210頁)。補足すると、家光による寄進について、塚田・榎本は「六阿弥陀年表」の慶安元年(1648)の項に「無量寺8石1斗、与楽寺20石、恵明寺20石、性翁寺10石御朱印下さる」と記している(『研究』205頁)。性翁寺(足立区扇)の本尊は「木余り」で知られている。これは六体の阿弥陀像が彫り出された木の残部からさらに行基が彫ったと言われるもので、同寺は六阿弥陀の「根本旧地」を自称している。末木の観音は昌林寺(北区西ヶ原)の本尊で、同様に江戸六阿弥陀の木残りと言われている。

る。但し、塚田・榎本は両者について、六阿弥陀の盛況を見てその恩恵に与るために作られたものと考察している（『研究』59-60頁）。開帳については、庄司千賀「六阿弥陀詣と熊野信仰」、『熊野誌』第34号、1988、143-144頁を参照。

- (6) 主に[1]『六阿弥陀伝記』と[41]『六阿弥陀縁起』に依拠して作成。縁起の異同については関根綾子「二編中巻十二「三郡六阿弥陀の巡路詠歌」（『昔話伝説研究』第23号「特集『遊歴雑記』」, 2003, 18-31頁）において最も詳細に整理されているが、ここでは『研究』の考察を紹介する。縁起の各要素の中で史料間の異同が大きいのは、①娘の実家・嫁ぎ先の組合わせと、②離縁、あるいは娘の入水の理由である。①について、娘の実家を「足立（沼田）氏」、嫁ぎ先を「豊島氏」とするか、その逆であるかで、史料は大きく二分される。この点について塚田・榎本は、「一つの口碑伝説の類い」から「どのようにして多種多様な形が生まれてきたか」を考察している。それによれば、豊島側は、表記に違いがあるとしても、多くは豊島左衛門尉清光という源頼朝家臣の実在の人物がモデルとされ、他方で足立側には統一された人物像が浮かび上がらず、とは言え豊島に比べて極めて高い地位に置かれている（豊島側は「東国の下級武士」、足立側は「都の貴族」）。「足立側に統一された人物像が浮かび上がらないのは、足立の地域は治承四年を一つの境として豊島氏に支配される地域であった」からである。「川を挟んで豊島といい、足立というも、常に足立側は豊島の風下に立つという勢力関係にあった」。以上から、「足立側が弱者の立場に立つ処からこの口碑伝説は端を発し、最も古い六阿弥陀伝説では、足立側に立つ人物を沼田と申す一人に代表させたものが時代と共に姿を変えてもろもろの人物像を産み出したものと考えられる」。加えて、この物語は「足立側の方に悲劇性が強く感じられ」、「この物語りがいづれの立場に立って語り継がれているかはこうしたことによっても理解出来る」。また②について、史料の多くでは、舅姑による（引出物や婚姻儀礼の不備などの理由による）謗言が挙げられている。この点について塚田・榎本は、物質的な事が一因とはなりつつも、精神的・肉体的な非難が強かったのではないかとし、舅姑は不満としたのは娘が子孫を残せないことであったと推察し、同じ見解に立つ史料として[24]『新編武蔵風土記稿』を挙げている（『研究』156-158頁）。なお、北区豊島には豊島清光開基の清光寺がある。同寺は六阿弥陀に数えられていないが、この点について平野實は、六阿弥陀縁起は元来清光寺のものであったがそれを他の寺が上手く利用したという説を、全く根拠がないと断りつつも「さもあろう」と記している（杉山博編『豊嶋氏の研究』名著出版、1974、136頁）。また、伝承における「娘」はしばしば、父方が足立側の場合は「足立姫」という名称で登場する。関根綾子は、娘の入水理由についての伝承は元々は複数あったが、時代を経るにつれて姑による「嫁いびり」に統一されていったと指摘し、その理由として、「足立姫」の墓がある性翁寺が足立姫入水の伝承を積極的に広めたこと、また足立周辺で嫁いびりのために入水した女性の霊を慰める伝説が語られていたことの2点を挙げている（関根綾子「六阿弥陀伝説考——入水理由の一考察——」、野村純一編『伝承文学研究の方法』岩田書院、2005、167-182頁）。
- (7) 本書の主題は「女人救済」であり、女人を導く仏としての六阿弥陀参詣を（熊野権現の参詣と同じ功德を得るものとして）勧め、その根拠として六阿弥陀の伝説を持ち出している。そのためか、六阿弥陀詣における女性の役割は非常に大きい。[14]『宴遊日記』に描かれているように、参詣者のなかではとりわけ老婆が目立つ（註10参照）。六阿弥陀の行楽としての性格が強

くなった後では、川柳にてこの点が強烈に描かれ、「六あみだみんな廻るは鬼ばばあ」（二三・2）などと詠まれている。[31]『理齋随筆』では「六あみだ^{よめ}の噂^{すてどころ}の捨処」という川柳が特筆され、道中の老婆に対し、罪滅ぼしのための参詣中に嫁の噂を念仏の代わりとするのはいかかかと苦言を呈したところ、いやいやこうして日頃の胸中に溜め置かれたものを晴らせることが彼岸の功德と言いつ返された、と記されている。古田悦造は、[24]『新編武蔵風土記稿』の「西福寺」の記事に六阿弥陀が女人成仏の本尊と言われていること、また十返舎一九『六あみだ詣』の挿絵（図 6 参照）に女性参詣者が多く描かれていることから、女人供養の縁起と女人の参詣との関係を指摘している（古田悦造「江戸の3つの「六阿弥陀参」における「武州六阿弥陀参」の特徴」、『歴史地理学』第 56 卷 2 号、2014、25-37 頁）。近代以降に関しても、1918 年の読売新聞掲載の写真からは、女性参詣者が多くいることを窺うことができよう（図 19 参照）。また、常楽院については、六阿弥陀詣全体とは違った観点から女性との関わりを指摘できる。例えば川柳に「麦飯がきらいけころの中にすみ」と詠まれたが、「麦飯がきらい」とは常楽院を指し、それが「けころ」、つまり上野山下周辺の私娼に囲まれていたことを意味している（「けころ」、粕谷宏紀編『新編川柳大辞典』東京堂、1995）。また 1912 年の朝日新聞には、常楽院に遊女が参詣している様子が伝えられている（図 18 参照）。

- (8) 北区史編纂調査会編『北区史』通史編・近世、東京都北区、1996、205-206 頁（加藤貴執筆）。
- (9) 道標や標石については、塚田『調査報告』、16-19 頁を参照。御詠歌については[11]『武州六阿弥陀巡礼御詠歌』を、縁起については[15]『六阿弥陀四番目略縁起』を念頭に置いている。
- (10) 当時の参詣の様子が、[14]『宴遊日記』の安永 6 年（1777）2 月 14 日の記事に描かれている。
「今日彼岸の終り阿弥陀参り往来甚賑し、天色大に晴、西南白雲如刷、平塚明神鳥居前より坂道を下り、利島郡へ行、行人にて塗甚込合、五歩六歩に路上仏を居へ、村姥数人念仏を唱へ、或ハ太鼓・鐘をうち建立の法施を請者夥く、疥癩の乞僧路上に満ち、辻博突有、畝中路上皆貝売雪の如し」（『北区史』資料編・近世 1、1992、393 頁）。
- (11) 六阿弥陀に関する新聞記事（案内、紀行文、縁起の紹介、写真等を含む）は、彼岸時に、読売新聞では 1875 年 9 月から 1921 年 9 月にかけて 47 回（ヨミダス歴史館、<https://database.yomiuri.co.jp/rekishikan/>、2019/01/10 閲覧）、朝日新聞では 1890 年 9 月から 1913 年 9 月にかけて 48 回（開蔵 II ビジュアル、<http://database.asahi.com/>、2019/01/15 閲覧）掲載されている。
- (12) 読売新聞 1910 年 9 月 22 日（朝刊、3 面）の記事に「寺僧の話では数年前には六阿弥陀詣も一時寂れたが昨今はまたまた盛り返し彼岸は一日三千人位の参詣者があるし祭日日曜には学生が澤山見えるさうだ」とある（ヨミダス歴史館、2019/01/10 閲覧）。引用中の「寺僧」は常楽院の僧侶と思われる。
- (13) [44]『郊外散策六阿弥陀詣』を参照。
- (14) この時期になると周辺環境も変わって行ったようで、長谷川零餘子は豊島の渡し場手前で亜硫酸ガスの臭気を感じたことを記している（[42]『ホトトギス』、1915、44 頁）。また、三輪善之助は郊外が住宅や工場に囲まれて佳景が失われたことを書き留めている（[47]『武蔵野』、1927）。さらに[50]『武蔵野から大東京へ』には、「殊に、工場労働者の巡礼が、眼立って増えて来てゐる。そのさかんなこと、ロシヤの曠野の聖地巡禮を思はせる。」と記されている。

- (15) 例えば、以下の二つ。[47]、「六阿弥陀と今昔」。[47]、伊藤晴雨。
- (16) 庄司千賀が各寺院の住職に取材して得た話を引用する。「各寺院の御住職のお話では、この六阿弥陀詣は戦前には蟻の行列の如く、多くの参拝者が訪れた。彼岸の中日には、参道を突っ切るのに苦労するほどの賑わいであったという。人々はお遍路さんの姿で鈴を鳴らし、般若心経や御詠歌を唱えながら各寺院を巡った。六番常光寺では、農家の人が主で、埼玉県の川口市や千葉県の幕張市などの東京近郊の人々が多かった。各寺院には参拝者を相手に甘酒やおでんなどを売る掛け茶屋が並び、一番西福寺ではすりや物乞いが出るほどであった。人々は七里の道を戦前は電車を乗り継いで、戦後は観光バスを利用してまわった。この六阿弥陀詣は戦後一年は跡絶えたが、昭和二〇年から二五年にかけてもとに戻った。しかし、昭和四〇年代にはいと、調布市に移転した五番常楽院が欠けるので、御利益が半減したこともあり、次第に参拝者が少なくなった。戦前には春秋の彼岸のあと、各寺院が輪番でどこかの寺に集まり、打ち合わせをしていたが戦後にはなくなった。」（「六阿弥陀詣と熊野信仰」、145頁）。なお、[50]には「彼岸の一シーズンに、六聖地を巡る信徒の数は、五六萬といはれ、中日だけでも約二萬人、それが年々増すばかりだ。」とある。
- (17) [44]によれば、常楽院は開創から彰義隊戦争に至るまで15回火災に見舞われた（註23参照）。同寺は記録に残されている限り三種類の縁起（[16]、[28]、[41]）を所蔵したが、この点について塚田・榎本は「度々の火災で発刊の都度に板木が焼失したためであろうか」と推察している（『研究』177頁）。なお、常楽院が位置していた下谷で発生した火災は、江戸時代を通じて137回である（東京市下谷区編纂『下谷区史』東京市下谷区、1936、1288頁）。
- (18) 「常楽院門前」、『御府内備考』卷之二十四「下谷之四」（蘆田伊人編『大日本地誌体系』第1巻、雄山閣、1929、481-482頁）。「常楽院」、『御府内寺社備考』寺院部天台宗（東京都台東区教育委員会編『台東区部文化財調査報告書 第30集 御府内寺社備考』第2巻「天台宗2」、東京都台東区教育委員会、2002、103-104頁）。いずれも末尾に「以上丙戌書上」とある。ここでの「丙戌」は文政9年（1826）のこと。
- (19) なお、東京都台東区編『台東区史』上巻（東京都台東区、1955）の727頁には「本寺は寛永寺建立前は山内にあったもので、寛永後、広小路へ移ったとあるが、出典不明。
- (20) 『御府内寺社備考』には「境内蕃椒地藏ハ眼病をいのるに験あり。其賽に蕃椒を供す故此名あり」とある（104頁）。また[43]『風俗画報』第382号では、この六体の石地藏が蕃椒地藏であると推察されている（註23参照）。
- (21) この他、[44]には宝永年間（1704～1711）設置の多宝塔があるとの記述がある。註23参照。
- (22) この他、常楽院を詠んだ『誹風柳多留』採用の川柳をいくつか挙げておく。「五番目の弥陀は麦めしきらひ也」（十三・9）。唯一江戸市中に位置することを主題としたもの。塚田によれば「五番目だけが江戸っ子でこれ以外は米の飯も満足にはという思い上がりも十分である」（『調査報告』、20頁）。「きせるをば土蔵のは入り口に置」（十二・3）。塚田によれば「上野は広小路という繁華街の為に火の用心でくわえ煙草などは以ての外でお堂も土蔵造りであった」（同20頁）。「五番目は一か六かへまはすなり」（十九・27）。常楽院への参詣は最初か最後に回したことを詠んだもの。なお、括弧は篇数・丁数。岡田甫校訂『誹風柳多留全集』（三省堂、1976-1984）に依拠している。

- (23) この時期における常楽院についての記述をいくつか引用する。「〔前略〕阿彌陀堂は土蔵作りにて、前に鉄製の水盤を置き、西畔に六軀の石地藏を列す。多く犬張子を掛く。世に蕃椒地藏をいへるは是にや。一碑あり木魚庵秋丸の俳句を刻す。／閑古鳥見て来た僧に逢にけり／當寺に古き護摩釜を蔵するよし。」〔43〕、第 382 号、4 頁)。「表門左傍には『六阿彌陀菩薩第五番目』と彫みたる碑あり門より右側には六地藏尊、觀音堂、地藏堂あり、左側には閻魔堂、庫裏等なり、前方には外陣、後方には内陣あり〔中略〕。寺記を按ずるに開創以來明治戊辰の兵乱に至り回祿十五度、門前に市街の開けしは寛永三年にあり、現今の本堂は谷中吉祥院として松平樂翁公の建立せられし聖天堂のありしを廢寺となりければ、明治十一年現住慈隆和尚の購建てたるものにして結構甚だ嚴美なり。本堂前なる青銅の多寶塔は寶永年中に設けたるもの、其外什物には護摩釜一口古色甚だ愛すべきもの等あり。」〔44〕、15-16 頁)。「行基菩薩御作五番の阿彌陀様、東京は廣小路、上野の下の常楽院にましまして、日夜信心の參詣は絶間がないといふ目抜の場所柄、別けて今日は彼岸の中日、埃が立たうが馬車が込合ふが、そんな事には頓着なく、おこし屋飴屋の長柄傘はひしひしと重り合つて並んでゐる。門をくゞると、六軀のお地藏様の前には夥しい線香の煙、天井に吊した犬張子は尻を眞黒に燻べられて、住居踊は煙の中に踊つてゐる。其煙の末はお地藏様と背中合せの煙草屋の屋根の物干に渦巻昇るといふ景気。片在所の阿彌陀様と事變つて、お堂も立派なり、參詣も夥しい。狭苦い境内は人で以て埋まつてゐる。左側の閻魔堂には閻魔様が大きな口をあいて御坐る〔後略〕」〔42〕、四方太、26 頁)。「上野の三橋際は大した人出である。露店の中を通つて行くと、六阿彌陀第五番常楽院といふ札を掛けた門前に出た。／門の内には六軀の地藏尊の石像が並んで、線香の煙に焦げて黒ずんでゐるのが見えた。地藏尊の像の前には小さな店があつて、線香を賣つてゐた。線香屋の御かみさんは、赤い目鏡の嵌めてある目かつらを顔に掛けて、子供と遊んでゐた。／門の内は雑沓してゐた。藝者風なやお茶屋の女中らしいのが、六阿彌陀詣の善男善女に交つて、鉦の音は絶間なく響いてゐる。／「オー」／「オー」／といふ筒抜けて大きな聲をたてゝ、お蠟を上げに立つて行く役僧の聲も交つてゐた。／堂の前には櫻の樹が一本ある。花はまだ咲かない。人は其下を入り亂れて參詣してゐる。阿彌陀様にお詣りした善男善女は閻魔堂に詣る事を忘れる事はなかつた。／「閻魔様は左側にあつたのだが、安政の地震の時、焼けてから、右側に建てたのだ」／私の後ろに立つてゐた人は、こんな事を謂つた。昔閻魔堂のあつたといふ跡には枇杷の木が一本淋しく残つてゐた。其前に張店して珠數を賣つてゐる處で私は金剛樹とやらいふ樹の實の珠數を買つて、型のやうに手首に掛けて歩いた。／門を出て、今朝の朝日新聞の虚子先生の「柿二つ」の中にある仰臥漫録の記事を思ひ出した。それは子規居士の書かれた文章を擧げてあるのである。／「母廣徳寺前にて嬰栗石竹等の種五六袋買うて歸らる。(嬰栗は余の所望なり)、おみやげ焼栗一袋(十個入二錢)は上野廣小路六阿彌陀へ參られし歸り門前の露店にて求められたりと。余、何故に、もすこし多く買はれざるかと問えば、餘り高き故なりと。」／私は子規居士の寫眞と、母堂の御顔を思ひ出した。」〔42〕、零餘子、42 頁)。

(24) [47]、三輪、31 頁。

(25) 同。

(26) [47]、「六阿彌陀と今昔」。

- (27) 以下、常楽院の移転に関しては本多慈昭氏のお話、赤札堂や小泉グループ株式会社設立に関しては石原徹氏と東側恒公氏のお話、小泉総合研究所編『小泉一兵衛 遺訓集』（小泉グループ株式会社、1978、非売品、東天紅上野本店所蔵）、「東天紅 30 周年記念誌」（1991、非売品、東天紅上野本店所蔵）、上野観光連盟編『上野繁昌史』（上野観光連盟、1963）に、赤札堂および東天紅敷地内に設置された常楽院別院に関しては主に石原氏、東側氏、田中裕子氏のお話、それぞれ依拠している。
- (28) 当時の赤札堂と小泉通音氏の人柄について、「東天紅 30 周年記念誌」に次のように書かれている。「そんな上野に、母・通音氏は単身乗り込み、昭和 20 年 9 月、上野広小路（現・「上野広小路店」所在地）に間口 3 間、10 坪足らずの平屋を建て「赤札堂」を再興した。衣料品の他に歯ブラシ、下駄まで扱った。／小さな店ではあるが、それが焼け野原の上野では、戦後初めての新築の建物であった。『通音さんは、女傑でしたね』と商店街の古老は語る。／「焼け野原の上野の土地や、目抜き土地を狙い撃ちするように買っていった。その一方で面倒見がよくて、上野駅地下道の浮浪者に飯を食わせてやったりしていました。街娼から芸人にいたるまで親切にして“女マッカーサー”とまでいわれていたんです」／上野の街は進取の気質に富む。〔中略〕／その上野に、通音氏は着目したのである。男顔負けの決断力、先見力、そして何よりも実行力……。」（21 頁）。
- (29) この仮堂は目立つところに設置されたものではないようである。1957 年 4 月刊行『国文学：解釈と鑑賞』第 22 巻 4 号「特集江戸文学地理」、88 頁の「常楽院」の記事に、広小路裏の細い路地に小堂が建てられていることが記されている。
- (30) 東天紅再建に際しては、地元の人から常楽院別院の処遇についての問い合わせがあったという。なお、別院の保存について、川柳家で元参議院議員の保坂三蔵氏の努力があったとの話もある（尾藤一泉「川柳江戸ある記① 江戸六阿弥陀詣—川柳で迎える江戸のお彼岸—」、『川柳さくらぎ』第 28 号、2015、17 頁）。
- (31) この例祭は、小泉通音氏の命日（1 月）を基準として半年ごとに行われている。しかし、小泉通音氏個人の慰霊や小泉グループの繁栄を願う祈祷ではなく、有縁無縁の仏のための「供養祭」である。また、毎年 10 月には、ABAB 赤札堂ビル内上階の会議室にて、小泉グループ全体の社員や関係者で亡くなった方への「慰霊祭」を行っている。これには小泉グループや関連企業の代表者 15 名程度が出席する。以上は本多慈昭氏のお話に基づくもの。
- (32) お堂以外のものは全て、別院が東天紅の旧店舗の敷地に設けられていた際の境内からそのまま持って来られたもの。しかし、それらがさらにそれ以前の、常楽院が上野広小路に居を構えていた時にあったものかどうかは不明である。
- (33) 以上、常楽院一回目訪問時の本多慈昭氏のお話に基づく。
- (34) 常楽院二回目訪問時の本多慈昭氏の発言。
- (35) 小泉グループ株式会社訪問時の石原徹氏の発言。
- (36) 以上、小泉グループ株式会社訪問時の石原徹氏のお話に基づく。なお、小泉一兵衛氏は天台宗の信徒であったという。しかしながら、小泉グループの見解によれば、一兵衛氏による常楽院に対するお世話は、必ずしも信心に基づく特別な行為ではなかった。

図版

- 図 1 執筆者撮影 (2017/08/24)。
- 図 2 塚田芳雄・榎本忠司『六阿弥陀の研究』第 13 号, 自刊, 1979。常楽院所蔵。
- 図 3 斎藤月岑著, 朝倉治彦校注『東都歳事記』第 1 卷, 平凡社, 1970。
- 図 4 幽篁庵編撰, 麗斎曙山画図『東都遊覧年中行事』1851。東京大学総合図書館所蔵。
- 図 5 大浜掬波『郊外散策六阿弥陀詣』服部書店, 1911。法政大学図書館所蔵。
- 図 6 十返舎一九『六あみだ詣』(博文館編輯局校訂『滑稽名作集』上, 博文館, 1894)。
- 図 7 松濤軒斎藤長秋『江戸名所図会 7 卷』第十七冊, 須原屋茂兵衛他, 1834-1836。国会図書館デジタルコレクション (<http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/2563396>, 2019/02/02 閲覧)。
- 図 8 『サンデー』第 146 号, サンデー社, 1911。東京大学大学院法学政治学研究科附属近代日本法政史料センター明治新聞雑誌文庫所蔵。
- 図 9 図 7 に同じ。
- 図 10 東都下谷絵図, 1857。国際日本文化研究センター (http://lapis.nichibun.ac.jp/chizu/santos_hi_1376.html, 2019/02/01 閲覧)。
- 図 11 『六阿弥陀詣 如来御伝記』。東京大学総合図書館所蔵。
- 図 12 東京都台東区教育委員会文化事業体育課編『御府内寺社備考』第 2 卷 (天台宗②), 東京都台東区教育委員会, 2002。
- 図 13 坪川辰雄撮影, 『風俗画報』第 382 号 (「新撰東京名所図会」第 53 篇・下谷区之部其 3), 東陽堂, 1909。
- 図 14 図 5 に同じ。
- 図 15 常楽院所蔵。
- 図 16 小泉グループ株式会社所蔵。
- 図 17 上野繁昌史 (続) 編纂委員会編『上野繁昌史 (続)』上野観光連盟, 1968, 188 頁「昭和 24 年 6 月, 広小路歩道上の露店にぎやかな頃」。
- 図 18 「彼岸の六阿彌陀詣り」, 朝日新聞, 1912 年 9 月 22 日付, 東京, 朝刊, 5 面 (聞蔵 II ビジュアル, 2019/01/15 閲覧)。なお, 挿絵の両側に各寺の絵についての簡単な描写が付されている。常楽院については「上野山下, 常楽院 土地柄にて善男善女の外に天神下邊の白粉焼した俄道心が続々来る。中には殊勝げに塔婆など書いて買っているのがある」と書かれている。
- 図 19 「お彼岸詣で—上野廣小路常楽院所見—」, 読売新聞, 1916 年 3 月 19 日付, 朝刊, 4 面 (ヨミダス歴史館, 2019/01/15 閲覧)。
- 図 20 上野繁昌史編纂委員会編『上野繁昌史』上野観光連盟, 1963, 572 頁, 「大正 12 年 8 月現在上野広小路通り」。なお, この略図の出典は記されていない。
- 図 21 都市整図社『火災保険特殊地図』下「1935-1940」, 1987, 下谷共集組合下谷区 No.1 い号 (沼尻長治, 昭和 15 年 2 月 29 日発行)。
- 図 22 広告, 朝日新聞, 1959 年 10 月 30 日付, 東京, 夕刊, 6 面 (聞蔵 II ビジュアル, 2019/01/15 閲覧)。

図 23 広告，朝日新聞，1959 年 11 月 27 日付，東京，夕刊，4 面（聞蔵 II ビジュアル，2019/01/15 閲覧）。

図 24 「東天紅 30 周年記念社史」，14 頁，「オープン当時の上野店」。東天紅上野本店所蔵。

図 25 Google ストリートビュー，2014 年 4 月撮影（2017/07/26 閲覧）。

図 26 執筆者撮影（2017/07/27）。

図 27 執筆者撮影（2017/07/27）。

補遺 江戸六阿弥陀に関する史料一覧

本補遺は、「江戸六阿弥陀（詣）」に関する史料を、江戸前期から昭和戦前期にかけて年代順に整理したものである（但、年代不明のものは関連する史料の次に並べた）。『研究』第 1 号「六阿弥陀文献目録」（1979）に依拠しつつ、その後に整理された史料や情報を補っている。但し、「六阿弥陀」に関する記事は各書のうちのごく一部分であることがほとんどであり、またその多くは既刊の史料集に収録されている。そこで本補遺では、「六阿弥陀」に関する記事が下記 4 種の史料集に収録されている場合、各書の原本や翻刻本には言及せず、書名の直後に各史料集の略称と頁数を付記するに留めた。また各書・雑誌の情報は、著名でないものについては可能な限り加えた。各書の情報は、特に断りがなければ『北区史』資料編近世 1 の解説に依拠している。

- ・東京都編纂『東京市史稿』遊園篇第三，東京市役所，1929，196-216 頁〔史遊〕
- ・東京都編纂『東京市史稿』宗教篇第二，東京市役所，1936，464-477 頁〔史宗〕
- ・塚田芳雄「六阿弥陀」，『調査報告』第 5 号，東京都北区郷土資料館，1990〔調査〕
- ・北区史編纂調査会『北区史』資料編近世 1，東京都北区，1992〔北区〕

[1] 六阿弥陀伝記〔調査 19（抄）〕

著者不明。全 6 巻。六阿弥陀の縁起を記す最古の書。塚田・榎本による国立国会図書館所蔵本底本の翻刻が同図書館に所蔵（第 3 巻まで）。近年、関根綾子が第 1 巻の翻刻を行った（「翻刻『絵入 六阿弥陀伝記』」，『澁谷近世』第 24 号，2018，31-47 頁）。塚田・榎本は各種目録に従って、本書の成立は明暦（1655-58）年間であり、延宝 3 年（1675）から元禄 12 年（1699）年にかけて 5 回、浄土宗関係の書として刊行されたと説明している（『研究』185 頁）。他方、関根は、目録の情報には信憑性がないとし、本書の成立を延宝 7 年（1679）と推定する（前掲論文，32 頁）。本書は仏教教義の観点から（とりわけ女性による）六阿弥陀参詣の功德を説くもので、史書ではない。縁起について、本書では娘の父は「沼田」、嫁ぎ先は「豊島」であるが、この点について塚田・榎本は「この書以前に口碑伝説が広くこの地方にあって伝記の著者はその中より沼田説をとったものか、或はこれが原本で後いろいろに変化したかの何れであろう」と述べている（『研究』197 頁）。

[2] 江戸鹿子〔史宗 464-465，調査 7，北区 9〕

地誌。貞享 4 年（1687）刊。

[3] 国花万葉記〔調査 7〕

全国地誌。元禄 10 年（1697）刊。

[4] 塩尻

天野信景著。随筆・見聞録。六阿弥陀に関する記述は巻七十の「忍のすさび」に収録。「二季の彼岸会，盆，十夜等府下の男女多く巡参す」とあり、塚田・榎本によれば同記事は享保 5 年（1720）頃

の執筆で「六阿弥陀に関する見聞記としては最古のもの」(『研究』107頁)。

[5] 六阿弥陀 木余如来略縁起

享保11年(1725)頃成立。『縁起叢書』収録(中野猛編『略縁起集成』第1巻「縁起叢書：第一冊-第八冊」, 1995, 359-361頁)。木餘性翁寺の境内に、入水した姫の唯一の遺品である数珠から生じた菩提樹が残されている、と記されている。

[6] 六阿弥陀 根本旧地 木余如来略縁起

成立年不明。『縁起叢書』収録(『略縁起集成』第1巻, 387-389頁)。

[7] 江戸内めぐり〔調査7〕

地誌。享保13年(1728)版と延享3年(1746)版がある。

[8] 江戸砂子〔史宗465, 調査7〕

地誌。享保17年(1732)刊。

[9] 江戸名勝志〔調査8, 北区17〕

地誌。享保18年(1733)刊。

[10] 続江戸砂子温故名跡誌

『江戸砂子』の続編。地誌。享保20年(1735)刊。

[11] 武州六阿弥陀巡礼御詠歌〔調査23(御詠歌のみ)〕

塚田・榎本によれば、延享2年(1745)版の一枚刷のもので、東京都立中央図書館所蔵(『研究』2頁)。二番延命寺より印施された(同100頁)。同97-98頁に全文翻刻されている。[25]と[35]に御詠歌が引用されているが、若干の異同がある(同98頁)。

[12] 江戸聴鹿子名所大全〔北区26〕

地誌。寛延4年(1751)刊。

[13] 誹風柳多留〔調査20-22(但し、出典の記載なし)〕

川柳集。明和2年(1765)から天保11年(1840)にかけて167篇刊行。六阿弥陀を主題とする川柳が多数収録。同書に見られない句は、選出元である『川柳評万句合』も参照する必要がある(森岡錠一編『川柳評万句合索引：五十音順』川柳雑俳研究会, 1988-1993)。

[14] 宴遊日記, 松鶴日記〔北区388-435〕

柳沢信鴻著。日記。前者は安永2年(1773)から天明5年(1785)、後者は天明6年から寛政4年成稿。彼岸時の記事に、六阿弥陀参詣に出かけたことがしばしば記されている。

[15] 六阿弥陀四番目略縁起〔調査3〕

安永9年(1780)再板。四番与楽寺による作成と考えられる。『縁起叢書』収録(『略縁起集成』第1巻, 365-366頁)。

[16] 六阿弥陀三番目略縁起, 六阿弥陀五番目縁起〔調査1-2〕

成立年不明。『縁起叢書』収録(『略縁起集成』第1巻, 362-364, 367-369頁)。それぞれ三番無量寺と五番常楽院による作成と考えられるが、ほぼ同文。

[17] 四神地名録〔北区57-59〕

寛永6年(1784)に幕命を受けて調査した江戸近郊の地誌・地理。「豊嶋村」と「宮城村」の記事にそれぞれ異なる縁起とその検討が記されている(但し、『北区史』には「豊嶋村」の記事のみ)。塚田・榎本によれば、本書は「伝説を紹介する上では最も古い記録」(『研究』46頁)。また「豊嶋村の

ものは今までにも引用されているが、宮城村のものはあまりみかけない」という点、著者が「伝説の受け止め方が川を隔てて異なる事にも注目している」点を指摘している（同）。

[18] 新編江戸志〔北区 75-76〕

寛政 8 年（1796）までの成立。各寺の記事が収録（但し、『北区史』には「西福寺」，「無量寺」，「与楽寺」の記事のみ）。

[19] 増補江戸年中行事〔調査 8，北区 296〕

享和 3 年（1803）刊と推定される。江戸の年中行事を月日順に紹介，解説するもの。

[20] ひとつと草〔史遊 196-201，史宗 469-471（抄），調査 15（抄）〕

太田南畝（藤原覃）編。文化 3 年（1806）刊。「六阿弥陀詣」の記事。紀行文。『六阿弥陀伝記』も参照しつつ，各寺の縁起の比較を行っている。塚田・榎本は，六阿弥陀が往古の鎌倉道に立っているという南畝の指摘は卓見であり，このことが六阿弥陀成立を考える上でヒントになるとしている（『研究』36 頁）。なお，久保田啓一による語釈・現代語訳が、『鯉城往来』第 16 号から第 18 号にかけて収録されている。

[21] 六あみだ詣

十返舎一九著。洒落本。初版本は文化 8 年（1811）から毎年一篇ずつ三篇まで刊行。

[22] 一話一言

太田南畝編著。安永 4 年（1775）から文政 5 年（1822）にかけて成立。巻二十五に「六阿弥陀四番本尊」の項。塚田・榎本によれば，これは文化 8 年（1811）頃の記述（『研究』108 頁）。『日本随筆大成』別巻「一話一言」第 4 巻，吉川弘文館，1978，21 頁に収録。

[23] 埋木の花〔北区 239-240〕

文化 9 年（1812）頃成立と推定される。江戸御府内と近郊の塚・墓・石碑等を絵図とともに説明し，関連する伝承・俗説を紹介するもの。「清光寺」の項に六阿弥陀と縁起について解説されている。

[24] 新編武蔵風土記稿〔北区 192-193〕

昌平坂学問所の地誌調所編纂。武蔵国の官撰地誌。文化 7 年（1810）から文政 11 年（1814）成稿。豊嶋郡豊嶋村の「西福寺」，足立郡小台村の「阿弥陀堂」の記事にそれぞれ異なる縁起が記されている（但し、『北区史』には「西福寺」の記事のみ）。その他，各寺の記事が収録。

[25] 遊歴雑記〔史遊 201-207，北区 340-343〕

十方庵敬順著。紀行文。文政 12 年（1829）完稿。六阿弥陀への言及は複数あるが，文化 12 年（1814）執筆の「三郡六阿弥陀の巡路詠歌」では縁起，参詣巡路，御詠歌が詳細に語られている。関根綾子「二編中巻十二「三郡六阿弥陀の巡路詠歌」」，『昔話伝説研究』第 23 巻，2003，18-31 頁を参照。

[26] 六阿弥陀詣 如来御伝記〔調査 14-15〕

著者不明。縁起・各寺挿絵付きの案内書。文化 14 年（1817）刊。武蔵野市立図書館，東京大学総合図書館所蔵。案内記のみ，石川謙『往来物落穂集』上巻，文修堂書店，1927，244-247 頁に翻刻されている。塚田・榎本は，本書を最初の大衆向けの案内書と推定し，また「木餘り性翁寺や西新井大師が出てくるのも案内書ではこれが最初である。〔中略〕六阿弥陀詣も信仰一筋から名所遊覧へと姿を変へていく様子も窺われる」と述べている（『研究』17-18 頁）。

[27] 六阿弥陀紀行〔史遊 207-216，北区 357-360〕

著者不明。紀行文。文政 7 年（1824）成立。名号「南無阿弥陀仏」の六字を一字ずつ頭とする歌を

六ヶ寺にて詠んでいる。塚田・榎本によれば『六阿弥陀詣』と同様に隅田川以東の記述に力が入っているのも化政度の人気であろうか』（『研究』36頁）。

[28] 六阿弥陀略縁起〔調査4〕

文政8年（1825）再板。『縁起叢書』収録（『略縁起集成』第1巻、356-358頁）。表紙に「亀井戸」の書込があり、六番常光寺による作成と考えられる。なお、この縁起と同文のものが、地誌調所編纂『御府内寺社備考』には五番常楽院の縁起として記されている（『台東区部文化財調査報告書』第30集、103頁）。常楽院の記事は文政9年（1826）書上。

[29] 武州江戸六阿弥陀巡拝之図〔調査23（御詠歌のみ）〕

案内図。文政12年（1829）版。四番与楽寺蔵板。各寺に新しい御詠歌が付されている。『研究』第13号の末尾に付属。

[30] 江戸近郊道しるべ〔史宗475-477、北区360-362〕

村尾正靖著。別名『嘉陵紀行』、『四方の道草』。紀行文。成立年不明だが、記述は文化4年（1807）から天保5年（1834）。「六阿弥陀」の項に寺名・地名が紹介され、また「六阿弥陀路程略記」に各寺までの道のりが記されている。この記事の執筆年も不明だが、書内の常光寺絵図に文政13年（1830）の再訪と記載。

[31] 理齋随筆〔史宗465-469〕

志賀理齋著。随筆。天保年間成立。巻一ノ二十「豊島清光の碑」にて、[8]や[17]等を踏まえつつ六阿弥陀伝説について考証されている。なお、塚田・榎本は同項の原本として同著『東都六阿弥陀考証』（成立年不明）を『研究』第6号に翻刻し、とりわけ、文書に記録されている伝説に類似する物語が豊島村に口碑として伝えられている、という記述に関心を寄せている（同46頁）。巻二ノ十「姫の噂の捨処」については註7参照。同項には参詣者の様子を示す挿絵「老嫗彌陀ヲ賽ス」も付属。

[32] 宝暦現来集

山田桂翁著。見聞録。天保2年（1831）。巻14に「六阿弥陀道記ノ事」。

[33] 江戸名所図会

斉藤月岑著。絵入の地誌。天保7年（1836）刊。六阿弥陀の各寺の基本情報、および挿絵（二番延命寺を除く）が掲載。また「甘露山延命寺」の項に続いて、入水した足立姫や侍女たちのゆかりの場所として「富士浅間祠」、「浅間淵」、「十二天森」、「餘木阿弥陀如来」が紹介されている。市古夏生、鈴木健一校訂『江戸名所図会』筑摩書房、1996など。

[34] 東都歳時記〔調査10〕

斉藤月岑著。江戸の年中行事を月順に紹介するもの。天保9年（1838）刊。朝倉治彦校注『東都歳事記』平凡社、1970など。

[35] 砂子の残月〔調査11（抄）〕

『江戸砂子』を補足修正したもの。成立は天保9年（1838）頃と推定される。縁起が記された後、不詳の書物『江戸名所志』の六阿弥陀に関する記事が引用される。「春秋二季の彼岸は順礼する者、布を引たるごとく群をなす」とある。江戸叢書刊行会編『江戸叢書』第9巻、鳳文書館、1992収録。

[36] 六阿弥陀巡拝記〔史宗471-475〕

著者不明。天保13年（1842）刊。[43]に引用されたものだが、出典不明。塚田・榎本によれば「本書の特色は彼岸の功德を説くことと、新たに御詠歌を作ったことである。この詠歌は第三番目のも

のとなる。案内に木餘りが載るのもこの頃には木餘り詣でが定着したことを物語るがごとくである。」
〔『研究』96頁〕。

[37] 東都遊覧年中行事〔調査11〕

江戸の年中行事を月日順に紹介するもの。嘉永4年(1851)。東京大学総合図書館所蔵。

[38] 武江遊観志略〔調査13(抄)〕

江戸の年中行事を月日順に紹介するもの。安政6年(1859)。三田村鳶魚著『江戸年中行事』春陽堂、1927に収録。

[39] 江戸砂子補正〔史宗465, 調査7-8〕

『江戸砂子』を加筆修正したもの。刊行年不明だが、万延元年(1860)以降の成立と推定される。

[40] 江戸町々いろは分独案内

江戸の町々の所在地を「いろは」順に記したもの。古典籍総合データベースにて公開されている(http://www.wul.waseda.ac.jp/kotenseki/html/ru04/ru04_01281/, 2019/02/02 閲覧)。後半の「神社仏閣名所旧跡独案内記」に「六阿弥陀」が紹介。なお、塚田・榎本は東京都立中央図書館所蔵の「加賀文庫」(私製)収録本を参照しており、成立年を文久3年(1863)としている(『研究』4頁)。

[41] 六阿弥陀縁起〔調査5-6〕

明治13年(1880)翻刻。稲垣泰一『六阿弥陀縁起』について：解説並びに翻刻、『文教大学国文』第47巻、2018、15-22頁を参照。なお、同縁起は[44]に常楽院のものとして引用されている。

[42] ホトトギス

文芸雑誌。明治30年(1897)創刊。第4巻7号(1901年4月)、「六阿弥陀詣」(14-30頁)。河東碧梧桐、寒川鼠骨、阪本四方太、高浜虚子の4人が揃って六阿弥陀を参詣し、見聞したものを持ち回りで綴ったもの。第18巻8号(1915年5月)、長谷川零餘子「六阿弥陀詣」(39-49頁)。

[43] 風俗画報

グラフ雑誌。明治22年(1889)から大正5年(1916)まで発行。東陽堂。増刊号「名所図会」東京近郊名所図会第2巻「北郊の部其2」1910の「南足立郡」項内に「ろくあみだもうで」の記事(23-27頁)。^[36]と、^[30]の「六阿弥陀路程略記」が引用される。常楽院については、第382号(「新撰東京名所図会」第53篇・下谷区之部其3)1909、4頁。

[44] 郊外散策六阿弥陀詣〔調査5-6(縁起のみ)、12(順路のみ)〕

大浜掬波著。明治43年(1910)。なお、^[41]の縁起を引用し(3-10頁)、その直後に「以上縁起は常楽院所蔵の縁起によりしものなり」と付記している。

[45] 東京年中行事〔調査12(抄)〕

若月紫蘭著、春陽堂、明治44年(1911)。東京の年中行事を案内するもの。上巻204-207頁「彼岸と六阿弥陀詣」。

[46] 放水路

永井荷風著。随筆。昭和11年(1936)成稿。大正3年(1914)の六阿弥陀詣の際に、荒川放水路開鑿のために景観が変わることを知り、以後参詣することを止めたと記す。

[47] 武蔵野

大正5年(1916)設立の「武蔵野会」(後「武蔵野文化協会」)の機関誌。大正7年(1918)創刊。第10巻4号(1927年11月)、三輪善之助「六阿弥陀巡礼」(29-34頁)。第20巻4号(1933年4

月),「六阿弥陀と今昔」。第 20 卷 5 号 (1933 年 5 月), 鳴子生「六阿弥陀詣の記」(68-70 頁)。第 28 卷 3 号 (1941 年 3 月), 伊藤晴雨「六阿弥陀の思ひ出」(13-15 頁)。

[48] 大東京繁盛記 山手篇

東京日日新聞社編, 春秋社, 昭和 3 年 (1928)。文学者や画家による都内各地についての随筆集。藤井浩祐著「上野近辺」の中で,「今もお詣りの人に変わりはないが, ただ善男善女の肩からかけた鈴の音は, 昔の様にさえて聞こえない。」と記されている。

[49] 共古随筆

山中共古著, 『芋蔓草紙』第 4 編, 温故書屋, 昭和 3 年 (1928)。随筆集。「影守雜記卷ノ一」の 105 「六阿弥陀ノ五番目」, 「影守雜記卷ノ二」の 7 「六阿弥陀試彫」。

[50] 武蔵野から大東京へ

白石実三著, 中央公論社, 昭和 8 年 (1933)。小説・随筆集。「六阿弥陀詣で」の項に短編と随筆掲載。